

青年期女性の進路形成に関する質的分析 —マレーシア・ペラ州の3つの学校を事例として—

鴨川明子[†]

Qualitative Research Analysis on Career Development of Adolescent Females: Case Studies of Three Schools in Perak State, Malaysia

Akiko Kamogawa

In the fields of Comparative and International Education, researchers on Malaysian education tend to focus much more on ethnicity than on gender, thereby classifying women as members of their particular ethnic group, rather than studying them in terms of gender issues. In other words, the researchers have shown great interest in ethnicity as an analytical category. However, gender equality in education is a valid subject for analysis because the percentage of female students in Malaysia has increased steadily at every level. Moreover, ethnicity plays a factor within the category of female education between Non-Malay and Malay women. Because ethnic issues are relevant to gender roles and social stratification, it is important to give due attention to perspectives of ethnic, gender and social stratification in examining career development.

Our research addresses three objectives by qualitative analysis through interviews and typology: first, to reveal whether there is the gap between career development of upper secondary female students and the reality of adolescent females; second, to determine various factors that influence the gap between career development and the reality; third, to reveal how different female students adopt or reject (identify) their initial choices as they progress through the educational level and by the comparison between inter-ethnic groups and intra-ethnic groups, to suggest a five-typed identification classification of career development. We recognize that near-universal education at the primary and secondary levels has made post-secondary education increasingly important for social mobility in Malaysia. Therefore, this study focuses on post-secondary education as an aid in career development.

The first stage of research used a self-completion survey questionnaire to provide basic informational data and consisted of three parts: career choice; career guidance; and gender roles. The study participants were 297 from five students attending three different upper secondary schools in Negri Perak (Perak State), Malaysia: Taayah Secondary Religious School, a single sex, mono-ethnic and fully-residential school in an urban area; Pei Yuen National Secondary School, a co-educational, mono-ethnic school in a small town; and Malim Nawar National Secondary School, a co-educational, multi-ethnic school in a rural area. The second stage of the study consisted of formal interviews with 44 students and four families, in order to reveal background factors and attitudes toward higher education and career options. At the last stage of the study, seven participants were selected as samples of five typical types among Malay and Chinese adolescent females.

In conclusion, analyzing career development and identification of adolescent females in a Malay

[†] 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科助教

sian context certainly suggests participants at the ages of 17 or 18 years differ from women of 18 to 20 years because the latter are closer to making these significant life decisions than are the former. Second, our research showed that gender, ethnic and social stratification influences their career development. The study reveals the significance of not only the influences of gender roles on career development but also the extent to which different factors influence women's choices among intra-ethnic groups. Finally, the five classifications of female career development showed women's reactions to a variety of higher education and career opportunities.

1. 問題の所在と研究の目的

本稿は、あらゆる教育段階で男女間の教育格差を解消してきたマレーシアを事例とし、進路形成過程における青年期女性の受容と葛藤（以下「自己同定」）の問題を、面接調査の言説分析と類型化によって明らかにするものである¹。

既に、第1次・第2次調査を通じて、エスニック集団間 (inter-ethnic groups) で進路が分化している点、エスニック集団内部 (intra-ethnic group) の進路展望が学校種別により異なる点、そしてそうした背景に性役割観が少なからず影響を及ぼす点が明らかになった²。本稿では、青年期女性の進路形成と自己同定について実施した第3次追跡調査の結果を示す。第3次追跡調査の研究設問は以下の3点である。第1に、フォーム・ファイブ時に女子生徒が描いていた進路展望と、中等教育修了後の実際の進路とにギャップがあるか否か、第2に、ギャップを生じさせる進路規定要因は何で、どのように作用するか、第3に、実際の進路に対して女性がどのように自己同定するか、という3点である。これらの研究設問を明らかにする前に、第1次・第2次調査の結果を概観し青年期女性の進路形成の全体像を示す。その後、第3次調査の結果から、進路形成の特徴をジェンダー、エスニック集団、階層に応じて5つの型に試論的に類型化する。

さて、人口2,664万人（2006年）を抱えるマレーシアは、マレー人と他の先住民族65.1%、華人26.0%、インド人7.7%とその他の少数民族1.2%で構成される複合民族社会である。マレーシア政府は、マレー人と華人との社会的・経済的不均衡を克服するために、雇用や教育の機会を是正するブミプトラ政策（1971年）を導入した³。それによって、マレーシアの教育制度もマレー人を優遇するように再編成された⁴。また、ブミプトラ政策は経済発展をねらうマンパワー政策と結びつき、間接的・副次的に女性の教育機会の拡大に影響を及ぼしてきた⁵。すなわち、マレーシアが抱える国民統合という問題と、エスニック集団間格差を是正するという課題、そして経済開発の途上でマンパワーを育成する必要性が重なり合って作用し、結果としてマレー人だけでなく女性の教育機会拡大にも貢献したのである。それゆえ、高等教育機会を優遇された対象はマレー人（女性）に限定されており、華人（女性）やインド人（女性）に対する機会は制限されるという問題が残されている。さらに、政府の肝いりで、技術者や専門職、企業家などのマレー人の「新中間層」が創出されている⁶。本稿では、このように国家政策の影響が強い進路形成のありようについて、エスニック集団、ジェンダーや階層などの複合的なカテゴリーから分析する。

第1次・第2次調査においては、後期中等学校におけるフォーム・ファイブの生徒を対象としたが、

第3次調査では、中等後教育から高等教育まで進学する（した）青年期の女性を対象とする。スエット・リン・ポン(1995)は、マレーシアにおけるエスニック集団内部とエスニック集団間の教育達成度の格差についての論文で、「初等・中等教育段階が普遍化されつつあり、社会移動を促進するためには中等後教育が徐々に重要になる」と指摘した[Suet Ling Pong 1995, p.249]。これは、マレーシアで社会移動を促し、エスニック集団間とエスニック集団内部の格差を解消するためには、より格差の大きい中等後教育に着目する必要があることを示す。また、後期中等教育から中等後教育への接続を扱う研究が待たれることも示唆する。しかしながら、マレーシアの教育に関する先行研究で高等教育や中等教育段階が着目されてきたが、中等後教育が注目されることは少なかった。

マレーシアの中等後教育の主な進路には、フォーム・シックス(Tingkatan Enam/Six Form)とマトリキュレーション・コース(Kursus Matrikulasi/Matriculation Course)がある。フォーム・シックスは、マレーシア高等教育証書(Sijil Tinggi Persekolahan Malaysia: STPM)を管轄するマレーシア入試評議会に運営される大学入学資格試験のための準備課程であり、修了後に受験するSTPMの結果如何によって、原則としてあらゆる大学への進学が可能である⁸。一方、マトリキュレーション・コースは、各大学で運営される大学入学を既に許可された予備課程であり、各大学の入学要件を満たすためのコースを提供する。加えて、在学者数が増加の一途をたどっている私立高等教育機関として私立大学や私立カレッジ⁹、教員になるための教員養成カレッジも中等学校卒業後にも進学できる。

2. 調査の概要

筆者は、2001年9月から2004年1月まで、3期にわたり断続的に女性の進路形成に関わる調査を実施してきた。まず、進路指導カウンセラーに対する予備調査(2001年9月)とパイロットテスト(2002年7月下旬～8月上旬)、質問紙による第1次調査(同年8月中旬～下旬)を遂行した。第1次調査の結果から、後期中等学校の生徒が進路選択する際に、エスニック集団別・性別に分化が見られることを確認した¹⁰。ただし、進路分化をもたらす要因や背景は、制限回答法による質問紙調査の方法上の限界から十分に把握できなかった。そのため、第2次調査では、後期中等学校の生徒と家族に面接し、エスニック集団間とエスニック集団内部に見られる進路規定要因の異同を調査した。さらに、第3次追跡調査として、青年期女性の実際の進路に対する自己同定の問題を調査することとした。これは、少なからず進路形成に影響を及ぼす性役割観という進路規定要因が、幼児期から少年・少女期、青年期とボトム・アップ式に形成されるという性質を有し、年齢に応じて影響する程度も異なると予測できるからである。

全期を通じた調査対象は、以下の3つの中等学校の在校生、卒業生とその家族である。まず、公立中等学校の内、①マレーシアで一般的な、共学の多民族校で、農村部の生徒が通うMalim Nawar国民中等学校(Sekolah Menengah Kebangsaan: SMK)¹¹、②小都市に位置する共学で華人学校のPei Yuan中等学校¹²、③都市にある進学校で、マレー人女子のみの全寮制学校、Taayah中等宗教学校¹³である。第1次調査のサンプル数(内訳)は、①がマレー人42人(男子9人、女子33人)、華人51人(男子20人、女子31人)、インド人女子1人、その他女子2人の計96人、②が華人103人(男子34人、女子69

人)、インド人女子1人の計104人、③がマレー人女子のみ97人で構成される合計297人である。第2次調査では、第1次調査から有意抽出した生徒44人に対して面接した後、4人の生徒には家庭で集団面接(非指示的面接法)した(当時16歳~17歳, 2002年8月22日~9月6日)。さらに第3次追跡調査では、第2次調査から各エスニック集団別の典型と考えられる5つの型の7人を選び、改めて面接した(当時17歳~19歳, 2003年12月18日~2004年1月18日)。なお、マレーシアの教育行政は強固なトップダウン方式であるため、学校における教育実践には国家の教育政策や計画が色濃く反映する¹⁴。したがって、州ごとの比較よりも同じ州内(本稿ではペラ州)で学校種別ごとに比較する方が、マレーシアにおける青年期女性の進路形成の一端を把握するためには有意義であると筆者は考える¹⁵。その反面、3つの調査対象校が、それぞれの学校種別を代表する学校であるかというサンプルの代表性の問題は残される。

3. 現実の進路に対する受容と葛藤

(1) 青年期女性の進路形成の5類型—試論—

フォーム・ファイブの女子生徒の「進路展望」に関わる第1次・第2次調査を通じて、性役割観が進路選択に及ぼす影響が、マレー人女子生徒と華人女子生徒で異なるだけでなく、同じエスニック集団でも学校種別によって異なることが明らかになった。その相違は以下の3点にまとめられる。

第1に、マレー人女子生徒は、男性(父親・夫)として、女性(母親・妻)として各々の役割に忠実であろうとするために高等教育に進学するが、高等教育後の展望は男女で異なる。一方、華人女子生徒は、自らの興味・関心や、職業的な成功、自己実現のために高等教育に進学する。家庭での性役割観を果たすために高等教育に進学するという、マレー人女子生徒に特有の発想そのものがない。第2に、多くのマレー人女子生徒は教師や看護師など「女性に適する」職業に将来就くことを望んだ。たとえば、教師を志望する理由は、教師が「負担が少な」く、性役割を守りやすい職業と考えるためであった。一方、華人女子生徒は、職業選択の際に性別は関係ないと考えるため、男女にふさわしい職業に対する回答がマレー人女子生徒ほど多くなかった。第3に、エスニック集団間だけでなく、エスニック集団内の相違が見られる。マレー人女子生徒の性役割観が高等教育アスピレーションに及ぼす影響も一枚岩ではない。より階層の高い学校出身のマレー人女子生徒は、夫の経済力が十分であれば、職業的な成功を望まないという特徴を有している。これは中間層が増加し女性の主婦化が進行しつつあるマレーシアの現代的側面の一端を示すと言えた。それに対して、出身階層が低いマレー人女子生徒は、卒業した後によりよい職業機会を得ることが切迫した問題となっていた。

以上、3点を踏まえて、第3次調査では、実際の進路に対して、女性自身が肯定的か否定的かという自己同定の問題を検討する。第1次・第2次調査と同じ母集団を追跡し、後期中等学校を卒業した女性に対して実施する。第3次調査に先立って、第2次調査を実施した当時に17歳前後であった女子生徒の進路形成について、階層、出身学校、実際の進路に応じてあらかじめ5つの型に分類した(図1)¹⁶。すなわち、学業成績が芳しくないために、「女性らしい」進路を選ばざるを得ない下層のマレー人女性(葛藤型)と、政府の人材育成策により理系への進学を促進されてきた新中間層のマレー人女性(受容型)、

青年期女性の進路形成に関する質的分析

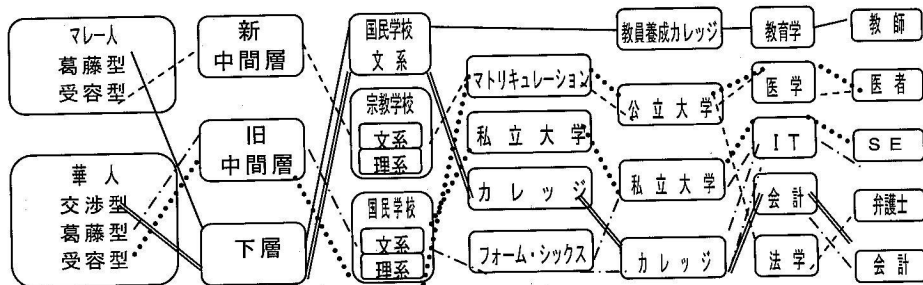


図1 青年期女性の進路形成の5類型—試論— (マレーシア・ペラ州)
出所: 調査結果より作成。

華人・女性という2つの属性により「二重の差別」を受ける可能性を有する旧中間層(交渉型・葛藤型)と下層(受容型)の華人女性である。あらかじめ分類した5つの型を、実際の進路をほぼ受け入れている場合(受容型)、葛藤しながらも半分受け入れている場合(交渉型)、強く葛藤している場合(葛藤型)と、それぞれの自己同定のありように応じて分類した。実際の進路への抵抗感は、受容型、交渉型、葛藤型という順に高くなる¹⁷。

(2) マレー人女性の葛藤型と受容型

まず、マレーシアで最も学校数が多く一般的な学校種別である国民学校のマレー人女性は、経済的な制約により中等教育後の選択肢が狭められることにジレンマを感じる「葛藤型」である。マレー人女性の葛藤型は、母親が学校で教育を受けたことがない点、父親が夕方早い時間に家にいる点など低い階層に特有の傾向を示す。また、教員養成カレッジに進み「女性に適する」職業として教師を目指そうとする。それは、教師が半日出勤した後は家事も育児もできるだけでなく、大学進学よりも短い年限で就職できることが理由である。あるいは、教員養成カレッジ以外のもう一つの選択肢として、フォーム・シックスにも進学できるが、フォーム・シックスで2年を費やしても、2年後の公立大学進学を確約されてはいないために断念する。より貧窮する場合、教員養成カレッジをも断念し、技術学校に進んだり工場で働いたりすることになる。

たとえば、Aさん¹⁸は、親戚に教師が多く自らの性格に教師が合うと考えたため、またフォーム・シックスに進学してもその後大学に入ることができるかどうかという見通しが立ちにくいいため、フォーム・ファイブ時には教員養成カレッジへの進学を望んでいた。しかしマレーシア教育証書(Sijil Pelajaran Malaysia: SPM)試験が「食べるに足る(cukup makan)」程度の成績でしかなかったため、技術学校の短期コースに通いながら教員養成コースを受講する機会をうかがっている。Aさんは、「教師になるために専門の養成コースを受けないといけないが、その申請が通るためには、経験と技術が必要。なかなか教師になれず長く待たないといけないようであれば、工場の仕事を探す」予定である。

Aさんのようにマレー人葛藤型は、成績や経済的要因を進路規定要因として挙げることが多い。SPMで「食べるに足る」成績を収めたCさん¹⁹の場合、母親が「マレー人はすごく成績がよければ勉強を続けるチャンスは幾らでもある。だから進学できないのは本人のせい」と断ずる。マレー人は成績さえよければ、ブミプトラ政策の恩恵により奨学金を得て高等教育機会を獲得することが比較的容易であるた

め、「家が貧しい」ことを希望通りに進学できない理由とするのは必ずしもあたらない。それゆえ、優遇されているにもかかわらず教育機会を得られなかったCさんは強い負い目を感じる。

もう一つのマレー人の型は、全寮制宗教学校タッヤに多い型である。自らの進路を受け入れているため「受容型」と呼ぶ。ペラ州の全域から集まった生徒の大半は中間層以上の家族出身で、母親の教育が他の型に比べて格段に高かった。葛藤型と異なり、ジェンダー規範の下で行動することがムスリマ（イスラームの女性）のあるべき姿と理解していたが、固定的な性役割観は受け入れない割合も高かった。そのため、経済状況に応じて家庭の役割に負担がかからない程度に働きたいと考えた。マレー人の受容型は、公立大学のマトリキュレーションに進学することが一般的な進路であり、大学学部では法学や医学などを専攻し、卒業後に医師や弁護士、科学者など比較的地位の高い職業に就くことを望む。このように学業達成度が高く一見選択肢が多いように見える受容型であるが、政府が経済開発過程で理系の人材育成に力を入れたことが影響して、本人が望むと望まざるとに関わらず理系への進学を勧められてきた経験がある。またいかなる職業に就いても、夫が仕事をやめるよう勧め子育てに時間を割く必要があれば仕事をやめることも厭わないことから、高い教育（多くは公立大学教育）を受けることが卒業後の社会的成功につながるか否かは、受容型の女性にとって重要とは限らない²⁰。

(3) 華人女性の交渉型、葛藤型と受容型

華人の事例は、調査を始めた当初（2001年）には想定していなかった型を含め3つに分類できる。

まず、国民学校マリム・ナワールの華人に典型的な型である。経済状況により選択肢が制限される上、華人というエスニシティ故に、マレー人ほど公立大学のマトリキュレーションに進学する機会も開かれていなかった。固定的な性役割観には反対し、経済的要因とエスニシティ要因により選択の幅が狭められるが、早い時期から希望と現実との折り合いをつけながら「華人らしい」進路を選択してきたため「交渉型」と呼ぶ。交渉型は、中等学校を卒業した後に私立カレッジに進学し、マレーシア社会で華人が多いとされてきた会計学や、産業構造の変化に伴い新しく華人の典型になってきた情報通信分野を専攻する。もしくはフォーム・シックスに進学することも可能な成績ではあるが、マレー人の葛藤型のように、フォーム・シックスで費やす時間の長さほどに結果が伴わないことを危惧して私立カレッジを選ぶ。

たとえばGさん²¹は、フォーム・ファイブ当時から私立カレッジの会計学コースを希望していた。両親はGさんの将来を考え、フォーム・シックスを経由して大学に進学することを勧めた。しかしGさん自身は「もし2年後に大学に入れなかったらと思うと、フォーム・シックスはあまり自信がなくて進むことができなかった」そうである。また、首都クアラ・ Lumpur の私立カレッジに行くほどの経済的余裕もなかったため、現在は地元の私立カレッジに通っているが、実践的な勉強ができる私立カレッジに満足している。

次は、華人がマジョリティである中等学校に多い型で²²、私立カレッジへの進学を経済的に負担であるとみなし、中等教育修了後にフォーム・シックスで少し時間をかけてでも公立大学に進学する機会をねらう型である。この型は、経済的要因により選択を狭められるだけでなく、華人というエスニシティ故に、中等教育修了後すぐにマトリキュレーションに進学する機会は得にくいという現実に対抗する「葛藤型」である。華人という属性により求められる基準が高いため、やむをえず進学したフォーム・

シックスでは、1年後に迫る STPM 試験に向けて努力するが、2年後の STPM の成績が優秀でなければ、華人が多い私立カレッジや私立大学のトラックに、交渉型から遅れて合流することになる。

たとえば、葛藤型の H さん²³の場合、SPM の結果こそ優秀であったが、華人に対する選抜基準の高さゆえ、マトリキュレーションに進学する機会を得られなかった。そして、我が身にふりかかるエスニック集団間の教育格差という現実を「もう仕方ないと言うか、変えることのできない現実」ととらえる。H さんには私立カレッジという選択肢もあったが、親の勧めで「授業料が安く大学に入る可能性もある」フォーム・シックスを選択した。そして、午前中はフォーム・シックスの授業、午後は遅くまで予備校に通い毎日忙しく勉学に励んでいる。

最後は、ペイ・ユエン中等学校の理系クラスで、華人で最も学業達成度の高い生徒に見られる型である。他の華人同様に男女平等と考え固定的性役割観を守るような形では進路を選ばず、その大半が現実の進路を受け入れているため「受容型」と呼ぶ。近年華人でも、SPM 試験で一定以上の成績をおさめた場合、マトリキュレーションに進学する機会が増えた。従来その大半がマレー人に開かれていた機会が、非マレー人にも拡大されたのである。そもそも葛藤型と受容型は、フォーム・ファイブ時にはマトリキュレーションに進学することを望んでいた。ところが、SPM の結果だけでなく、都市以外に居住地があるかどうかを選考基準となるという選考にかけられたために別々の進路を歩むことになった。葛藤型は大学に進学することができるかどうかという結果を2年後に持ち越され、受容型は中等教育卒業後すぐに「目標」が叶ったのである。ただし、受容型も新しく与えられた機会を手放して喜ぶというよりは、華人の友人が少ない環境に身を置くことに一抹の寂しさを覚える面も見せる。あるいは、卒業後の職業機会が、エスニシティに関わらず平等に開かれる可能性は不透明であると判断し、マトリキュレーションに入学しない生徒もいた²⁴。

E さん²⁵のケースを見てみよう。E さんは、SPM の成績が大変優秀であったため (10A)、フォーム・ファイブ時からの希望通りにマトリキュレーションに進学する機会を得たが、マレー人を優遇する奨学金は思うように獲得できなかった。それにもかかわらず、「10%の非マレー人がマトリキュレーションに通うことができるようになっただけでも進歩だと思う。少しだけ」と現実を冷静に受け止めていられるのは、華人にはまれな機会を得た誇り故であろうか。E さんは、大半が華人の学校に中等学校まで通っていたため、「90%がマレー人で、10%が非マレー人」で構成されるマトリキュレーションで初めてマレー人と共に学ぶようになった。入学当初こそ「マレー語のスラングが分からないこともあってとまどった」が、「今は特に問題なくうまくやって」おり、マラヤ大学の医学部に入り医者になることを志望している。

4. まとめと課題

マレーシア・ペラ州における面接調査の質的分析による、青年期女性の進路形成と自己同定の問題は次のようにまとめられる。

まず、フォーム・ファイブ在学時に調査対象者が描いていた進路展望と、中等教育修了後に1年程度経った時点で歩んでいた進路には相違が見られる点である。調査対象者の中には、フォーム・ファイブ

時の進路展望の通りに進路を選ぶことはできていない女性もいた。その多くは、SPMの結果や様々な進路規定要因の影響を受けていた。また、同じエスニック集団内部でも階層に応じて進路選択の幅が狭められ、そのため進路展望と実際の進路とが異なる女性もいた。殊に、下層のマレー人女性の理想と現実とのギャップは顕著であった。そして、ギャップが大きければ大きいほど、機会が与えられたブミプトラであるにもかかわらず、その機会を存分に活用できないことにジレンマを感じていた。

次に、現実的な進路形成に影響を及ぼしかつ葛藤を生じさせる要因は、経済的要因、固定的性役割観に示されるジェンダー要因、そして自らのエスニック集団に対する帰属意識に起因するエスニシティ要因という3つに分けられる。加えて、進路規定要因に対する反応も、エスニック集団や階層に応じて多様であった。概して、マレー人女性は固定的性役割観が進路選択に影響しやすいが、華人女性はエスニシティや階層、成績などの要因の方が、進路を規定する際に作用する傾向が強い。また、エスニック集団にかかわらず、より低い階層の女性の方が葛藤を導く要因が多かった。

さらに、ジェンダー要因が進路形成に及ぼす影響に着目すると、伝達されてきた性役割観に従い進路を形成するのは、マレー人女性の下層(葛藤型)と新中間層(受容型)である。それに対して、華人女性は、両親や祖父母が継承してきた「伝統的」性役割観を受け継ぐ必要がないと考え、「女性らしさ」には縛られずに進路形成する。また、経済的要因に対する葛藤は、下層のマレー人女性(葛藤型)と華人女性(交渉型)で強い。加えて、エスニック集団別の進路のステレオタイプや教育機会の格差に葛藤するのは、旧中間層の華人女性(葛藤型)であった。受容型の華人女性は、ブミプトラ政策により華人の教育機会が狭められてきた現実を目の当たりしてその現実に抗するというよりも、限られた範囲内で最善の選択をすることで折り合いをつけようとしていた。このように程度の差はあるが、あらゆる型の女性が進路形成に葛藤を伴っていた。しかしながら、華人らしい進路を選択する場合(受容型)と、マレー人がマジョリティである進路を選ぶ場合(受容型)に限り、自らの進路を受け入れる傾向が見受けられる。それに対して、エスニック集団別や性別に典型的なトラックから外れると、より多くの葛藤が生じると言える。

最後に、女性の進路形成を5つの型に試論的に分類することによって、実際の進路に対する自己同定が多種多様である点が示された。エスニシティの観点からのみ進路分化をとらえると、華人女性が進路に強く葛藤すると思えられがちである。しかしながら、マレー人女性の中でも、経済的な要因により自ら希望する進路を選ぶことができない場合や、優秀な成績を収めたが故に選ぶべき分野が定められる場合もあったことから、マレー人女性も納得のいく選択ばかりではない。もっとも、進路形成に対する自己同定が一枚岩ではない華人女性が、華人という属性故に、一様に中等後教育の機会が狭められてきたことは事実である。そして、そうした事実に対する深層心理の葛藤は、筆者の想像など及ぶべくもないことは付言しておく。加えて、多様な女性の進路形成が、これら5つの型の全てにあてはまるはずもなく、分類し類型化するという作業から、再び個別・具体的な事例に目を配る作業を経る必要がある。

今後は、より高い教育機会を女性に普及する、あるいは女性が教育機会を獲得していくという課題に、マレーシア・ペラ州の事例がどのような示唆を提示できるかについて本稿を基礎資料として検討する²⁶。具体的に、実地調査の結果を分析・評価する際に、マクロ次元において、国家、学校、家族など社

会の基本類型による影響を受けながら女性の生涯設計が規定される構造と、マイクロ次元において、女性自らが進路を形成していく過程を「女性の生涯設計モデル」としてモデル化する²⁷。この女性の生涯設計モデルは、国家の開発過程で規定される「女の生涯」における教育の現代的意味と、そこから導かれる問題群を明らかにすると考える。さらに、明らかになった問題群の下で、自らの選択を受容したり葛藤したりしながら、女性が自発的に進路を選択する営為と構造が描かれるモデルである。

註

- 1 『多項目 教育心理学辞典(教育出版, 1986年)』で、「青年期」は「思春期の身体発達と性的成熟の開始から、大人としての心理的社会的成熟に達するまでの時期。およそ中学生から大学生に相当する年代」と定義付けられ、17歳を境に前・後期の2区分に分けられる。
- 2 鴨川明子(2003)「後期中等教育段階における生徒の性役割観と進路選択—マレーシア・ペラ州の実地調査より—」日本比較教育学会『比較教育学研究』第29号, pp. 152-169.
- 3 「ブミプトラ」とは「土地の子(sons of soil)」を意味するマレー語であり、マレー人と他の少数民族を指す。
- 4 Selvaratnam, Viswanathan (1988), Ethnicity, Inequality, and Higher Education in Malaysia, Comparative and International Education Society, Comparative Education Review, 32(May 1988), no. 2, pp. 173-196.
- 5 ムトゥ, ラジェンドラン(2003)「マレーシア社会におけるジェンダー—課題・対応・挑戦—」アジア女性交流・研究フォーラム『アジア女性研究』第12号, pp. 85-97.
- 6 マレーシアにおける階層は富裕層, 中間層, 下層に分けられる。中間層は, 自営農民や商工業者の旧中間層, 技術者・専門職, ブミプトラ企業家の新中間層などから成る。都市の新中間層は, ブミプトラ政策と新経済政策とが連動し「創出」された(鳥居高(2002)「マレーシアの中間層創出のメカニズム—国家主導による育成—」服部民夫・船津鶴代・鳥居高編『アジア中間層の生成と特質』アジア経済研究所.; Abdul Rahman Embong (2001) State-Led Modernization and the New Middle Class in Malaysia, Palgrave Macmillan.)。
- 7 エスニック集団の多様性や, ブミプトラ政策が実施された背景を説明し, 1988・89年のマレーシア家族生活調査(Malaysian Family Life Survey)から, エスニック・社会階級とジェンダーの格差を論じた(Suet Ling Pong (1995) Access to Education in Peninsular Malaysia: ethnicity, social class and gender, British Comparative and International Education Society, Compare, Vol. 25, No. 3, pp. 239-252.)
- 8 Yaakob Isa (1996), Almanak Pendidikan, Berita Publishing, pp. 350-351.
- 9 私立高等教育機関について, 杉本均(2003)「第2章 マレーシアにおける高等教育の民営化の特質」『アジア諸国における中等・高等教育の民営化に関する実証的比較研究—その特質と問題点に関する考察—』(平成13~14年度 科学研究費補助金基盤研究(B)(1)) (課題番号 13410075) 研究代表者 村田翼夫)に詳しい。
- 10 各々「エスニック・トラック」と「ジェンダー・トラック」と呼ぶ。
- 11 SMK Malim Nawar, Sri Mawar 2001 Julid 12. 参照。
- 12 S. M. J. K. PEI YUAN, S. M. J. K. PEI YUAN (培元国中) Majalah Sekolah 2000. および S. M. J. K. PEI YUAN, S. M. J. K. PEI YUAN (培元国中) Majalah Sekolah 2001. 参照。
- 13 Sekolah Raja Perempuan Taayah, Sejarah Perkembangan SEKOLAH RAJA PEREMPUAN TAAYAH 40 tahun 1960-2000. と Sekolah Raja Perempuan Taayah, BAKTI 2001. 参照。
- 14 Marzuki, Sharril, Charil (1995/1998), Pendidikan di Malaysia, Utusan Publication & Distributors: Kuala Lumpur, pp. 74-76. および竹熊尚夫(1998)『マレーシアの民族教育制度研究』九州大学出版会, pp. 23-25. 参照。
- 15 調査対象校を選定する際, マレーシア科学大学(USM)のMolley Lee. N. N 教育学部准教授(当時)から指導や助言を受け, ペナン州・クランタン州・ペラ州の教育行政担当者と学校関係者に面会した。そして近接する生活空間にマレー人と非マレー人が相当数居住し, 同一・類似条件下の進路形成の多様性を描きやすいペラ州を選定した。錫鉱山開発の華人労働者が移住したペラ州の教育史は, Persatuan Sejarah Malaysia Cawangan Perak dengan kerjasama Yayasan Perak dan Jabatan Pelajaran Perak (1985), Sejarah Perkembangan Pendidikan Negeri Perak, Cipta Printing: Ipoh. を参照した。華人学校の分類は, 「国民統合のための手段として実施される国民教育政策」の下で, 華人が「政治的マイノリティとしてとってきた教育・言語戦略」について分析する, 杉村美紀(2000)『マレーシアの教育政策とマイノリティー—国民統合のなかの華人学校—』東京大学出版会を, またマレー人を優遇するために設立された全寮制中等学校の内実については, 竹熊尚夫(1991)「マレーシアにおけるマレー系エリート教育の発展とその特色—全寮制中等学校の場合」『比較教育学

研究』第17号をそれぞれ参照した。

- 16 本稿の調査対象者は、父母の職業や教育歴から、タッサから新中間層、ベイ・ユエンから旧中間層、マリム・ナワールから下層の典型例を抽出した。
- 17 註6参照。
- 18 Aさん、マリム・ナワール（文系）マレー人女性、父は学校の用務員（前期中等教育、母は主婦（非教育）。マリム・ナワール中等学校卒業後、マラ技術学校職業コースに進学。2002年9月4日、9月5日、2004年1月8日の3回面接。以下、対象者のプロフィールは順に、学校名（クラス）、エスニック集団と性別、親の職業（教育歴）、第3次調査の対象は、卒業後の進路、面接日と回数を記す。
- 19 Cさん、マリム・ナワール（理系）マレー人女性、父は下級公務員（スタンダード・シックス）、母は主婦（非教育）。マリム・ナワール中等学校卒業後、工場勤務。2002年9月2日、9月4日、2004年1月8日の3回面接。
- 20 ただし、第1次・第2次調査から1年半経った後の追跡調査であるため、受容型は、既に地元（ペラ州）を離れて大学のマトリキュレーションに進学しているケースが多く対象者へのアクセスには制限があった。
- 21 Gさん、華人女性（文系）、マリム・ナワール中等学校卒業後に私立カレッジ、父は鉄工場労働者（初等教育）、母は主婦（非教育）。2002年9月3日、9月4日、2004年1月10日の3回面接。
- 22 ベイ・ユエン理系1クラス出身の生徒の進路は、41人中（男子23人、女子18人）、フォーム・シックス24人、マトリキュレーション7人、その他・不明が10人である（2004年1月）。その他の中には、奨学生としてシンガポールの大学に進学する生徒や、私立カレッジに進学する生徒がいる（受容型3人への面接より）。
- 23 Hさん、華人女性（理系）、父は商売（前期中等教育）、母は無業（スタンダード・シックス）。ベイ・ユエン卒業後、スリ・カンパールのフォーム・シックスに進学。2002年8月22日と2004年1月15日に2回面接。
- 24 Iさんによると、「マトリキュレーションには、2000人通っておりその内153人が非マレー人。10%の非マレー人が選ばれたが、実際には8%ぐらいしか入学しなかった。入学しなかった人の進路はあまり定かではないが、留学や私立大学などがある。マトリキュレーションの授業料は、入学時に600RM（試験代など含む）と第2 Semesterには120RMを支払う。ただし、毎Semesterに1000RMずつ補助がある（華人女性（理系）。父は自動車販売（前期中等学校）、母は主婦（前期中等学校）。ベイ・ユエン卒業後マトリキュレーションに進学。2002年8月22日と2004年1月16日の2回面接）」である。
- 25 Eさん、ベイ・ユエン（理系）華人女性、父はトラック運転手（スタンダード・シックス）、母は主婦（前期中等教育）、ベイ・ユエン卒業後にマトリキュレーション進学。2002年8月22日、2004年1月16日の2回面接。
- 26 「第2回 Japan Education Forum（国際教育協力日本フォーラム、日程：2005年2月8日、於：学術総合センター、主催：文部科学省、外務省、広島大学、筑波大学）」における「女子教育の普及—発展途上国の視点—」という政策パネルにおいて、マーシー・テンボン（世界銀行人間開発ネットワーク上級教育専門官）は、女子教育を普及する取り組みの残された課題の一つとして、「初等教育から、中等教育、高等教育へと前進すること」を挙げた。
- 27 本研究で構築するモデルは、目指すべき模範という意味でのモデルではなく、現実をできるだけ忠実に抽象化する試みという意味でのモデルを示す。